

IDF と GDP が共同意見書「動物性と植物性のバランスを」

国連委員会「栄養のためのフードシステムに関する自主ガイドライン」原案

国連の世界食料安全保障委員会(CFS)で進められている「栄養のためのフードシステムに関する自主ガイドライン」(以下「自主ガイドライン」という)策定交渉で、国際酪農連盟(IDF)とグローバル・デーリー・プラットフォーム(GDP)が8月、ガイドライン原案(*1)に対し、共同で意見書を出した(*2)。意見書は「持続可能な健康的な食事:植物性食品と動物性食品のバランス」と題し、「増加する世界人口の栄養・エネルギーの需要を満たすため、動物と植物を競合するものとしてではなく、栄養面、社会面、経済面、環境面で異なる利益をもたらす相乗効果のある食料源として考えるべきだ」と結語部分で指摘している。ガイドライン原案の酪農乳業に関する部分の記述と併せて紹介する。

自主ガイドラインとは

国連総会は2016年、同年から2025年までを「栄養のための行動の10年」と定めた。食糧農業機関(FAO)および世界保健機関(WHO)に、世界食糧計画(WFP)、国際農業開発基金(IFAD)および児童基金(UNICEF)と共同で、CFSなどのマルチステークホルダープラットフォームを利用しつつ実施を先導していくよう求めた。また、各国政府、国際・地域機関、市民社会組織、民間セクターや学術機関を含むその他の関係者の積極的な参加を要請した(*3)。

国連の政府間機関であるCFSは、2021年2月の採択に向けて自主ガイドラインの交渉を進めている。交渉には加盟国と民間セクターが参加している。IDFとGDPは民間セクターの主要メンバーであり、酪農乳業界の代表として共同の立場で交渉全体の活動に参画している。

自主ガイドラインは、政府、専門機関およびその他のステークホルダーのための参照文書として、栄養不良の基本的・根本的な原因に対処するための適切な政策、投資、ならびに環境、生計、将来の公平な栄養食品の配分におけるフードシステムの役割に関する手引

を提供することが期待されている。酪農乳業セクターにとって、自主ガイドラインの作成に参加し、酪農乳業が世界的なフードシステムの主要構成要素として公正かつ正確に記述されることは重要である。

自主ガイドラインの目的と重点領域

自主ガイドラインの目的は、「フードシステムの転換に貢献し、持続可能なフードシステムを推進して、『信仰、文化、伝統、食習慣、個人の好みに従いつつ、国内および国際的な法律と義務にのっとり』、持続可能な健康的な食事に寄与する食品が入手可能であり、手頃な価格で、アクセス可能で、安全で、適切な量と品質であることを保証すること」とされている。

自主ガイドライン原案は次の七つの重点領域で構成されている。

1. 透明で民主的で説明責任のあるフードシステムのガバナンス
2. 気候変動との関連で改善された食事と栄養のための持続可能な食料供給
3. 持続可能なフードシステムによって提供される健康的な食事への公平なアクセス
4. 持続可能なフードシステム全体の食品安全

5. 社会的関係、食事の知識と文化
6. フードシステム全体における男女平等と女性の能力向上
7. 人道的状況に応じた強靱なフードシステム

酪農乳業に関する記述

自主ガイドライン原案では、主に環境の持続可能性や栄養、食料生産のイノベーションなどの観点から、酪農乳業に関連した記述が3点ある。

一つ目は、重点領域2の細項目「農業および食料生産における栄養の推奨」にある、次の記載だ。

「政府関係者、民間セクターの関係者、提供者、その他の関連するステークホルダーは、果物、野菜、ナッツ類、種子、マメ科植物、栄養成分強化作物(従来の農場での育種を通じて開発)などの栄養価の高い作物や、小規模農家や家族農家の生計を念頭に置いて開発された多様な動物性食品や育種(乳・乳製品、魚、卵、肉など)を生産するための研究、開発、イノベーションに投資する必要がある」

二つ目は、同じ重点領域2の細項目「食品の貯蔵、加工、変換および再調製の改善」にある、次の記載。

「政府関係者、民間セクターの関係者、農家、およびその団体は、農場、収穫後の貯蔵中、および加工、輸送、小売(特に果物、野菜、乳・乳製品、卵、魚および肉などの生鮮食品)を通じて食品や栄養素のロスの最小限に抑えることを円滑化すべきである。円滑化には、管理慣行の改善と適切なテクノロジーの採用の促進に関する訓練と能力が含まれる」

三つ目として、上記重点領域5の細項目「政策とツールを利用して健康的な食事に関する教育と情報を提供」に、次の記載がある。

「政府関係者は、市販の育児用調製粉乳

やその他の母乳代替品のマーケティングを規制し、『母乳代替品の国際マーケティング規範』およびその後の世界保健総会の決議を履行する必要がある」

IDF と GDP の共同意見書

8月に、IDFとGDPは共同で自主ガイドラインの交渉のための原案に対して意見書「持続可能な健康的な食事:植物性食品と動物性食品のバランス」を発表し、以下の点を主張した。

- 食事の質は個々の栄養素ではなく、食物全体によって決まる。食品マトリクスは重要である。
- 動物性食品で補完された植物ベースの食事は、ビタミンとミネラルの多様性や生物利用性を高め、高品質のタンパク質源を確保する。
- 栄養・健康、経済、社会、環境のすべての側面で、持続可能なフードシステムにおける畜産の肯定的な役割のより良い認識が必要である。
- 動物性食品と植物性食品は、競合する存在として考えるべきではなく、異なる栄養的、社会的、経済的および環境的な便益を提供する相乗的な食料源として考えるべきである。

さらに意見書では、畜産の有益な役割について次の点を述べた。

- 家畜、特に反芻動物は、他の方法ではCO₂を出す側に回る可能性のある、人が食べられない植物や植物副産物を消費し、人が食べられる高品質の食料品に変えている。
- 作物の成長に適さない土地に家畜を放牧できるため、放牧した家畜が利用する土地の多くは食用作物と競合していない。
- 家畜が放牧されている全世界の土地の

70%近くは、食用植物の生育には適していない。この土地に家畜が生息して放牧が行われなければ、生産性の高い牧草地も非生産的な草地と化すだろう。

- 家畜は、植物の成長を助ける重要な天然肥料と堆肥化材料を提供している。

おわりに

2015年に採択された国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」は、2030年の達成を目指す世界の共通目標である。2019年の国連総会では、SDGs達成に向けた首脳級会合が開かれ、2020年からの10年を「行動の10年」とすることが提唱された。

先行する「栄養のための行動の10年」に関連した活動が活発化している。その一環が、今回取り上げたCFS「栄養のためのフードシステムに関する自主ガイドライン」策定の活動である。酪農乳業セクターを代表して国際組織であるIDFとGDPが、酪農乳業の役割や重要性について分かりやすく主張をしている。SDGs達成に向けた、この国連活動の動向に注目したい。

*参考資料

- 1) “Voluntary Guidelines on Food Systems for Nutrition (VGFSyN) – Draft for Negotiations”. FAO Committee on World Food Security.
http://www.fao.org/fileadmin/templates/cfs/Docs1920/Nutrition_Food_System/CFS_Voluntary_Guidelines_Food_Systems_Nutrition_Draft_for_Negotiations_16Mar.pdf
- 2) “Sustainable healthy diets: balance between plant and animal-source foods”. International Dairy Federation and Global Dairy Platform. August 2020.
[https://www.fil-idf.org/wp-](https://www.fil-idf.org/wp-content/uploads/2020/09/Sustainable-Healthy-Diets.pdf)

[content/uploads/2020/09/Sustainable-Healthy-Diets.pdf](http://www.fao.org/japan/news/detail/en/c/409422/)

- 3) 「国連総会が『栄養のための行動の10年』を宣言」FAO 駐日連絡事務所 2016年4月1日

<http://www.fao.org/japan/news/detail/en/c/409422/>

(閲覧:2020年9月16日)

(Jミルク 国際グループ 新光一郎)